

ヒトクローン研究の容認度に関連する要因についての調査研究

指導教員 福井 智紀(教職課程)

P04097 坂野 恵子

1. 研究目的

生命科学技術の高度化によって、科学者ではない人々(非専門家)も個人としての意思決定や社会における合意形成への参加を求められる時代となりつつある。しかし、生命科学技術の問題に対して、人々がどのように意思決定するのかについては、まだ十分研究されていない。そこで本研究では「ヒトクローン研究」に焦点を当て、以下の研究目的を設定した。

- (1) ヒトクローン研究を推進すべきか禁止すべきかの判断(容認度)に対し、どのような要因が関連しているかを明らかにする。
- (2) ヒトクローン研究の容認度によって重視される要因が異なるかを明らかにし、その背景を考察する。
- (3) ヒトクローン研究について、望ましい意思決定に必要な知識・能力を考察する。

2. 研究方法

- (1) 論文・書籍・新聞・政府調査等の文献をもとに、ヒトクローン研究の現状や賛否に関わる論点を整理する。
- (2) (1)をもとに、人々がヒトクローン研究の賛否を判断する際に、どのような要因を重視しているかを明らかにするため、調査問題を作成する。さらに、予備調査を実施し、調査問題を修正する。
- (3) 学生を対象に調査を実施し、ヒトクローン胚研究とクローン人間研究への賛否を問う。さらに、これらの判断に関連する要因について探索的因子分析を行う。明らかになった要因(因子)をもとに容認度関連性尺度を作成し、ヒトクローン研究の賛否等によって重視する下位尺度に違いがあるかを明らかにする。
- (4) 以上の結果に基づいて、被験者の判断(意思決定)の背景を考察する。
- (5) その他の結果もふまえ、ヒトクローン研究について、望ましい意思決定に必要な知識・能力を検討する。

3. 結果と考察

被験者124名のうち、ヒトクローン胚研究への賛成派は76.7%、クローン人間研究への賛成派は34.5%であった。因子分析を行った結果、5つの因子が抽出された。これらを「生物・医学的可能性」「発展競争」「子孫継承」「女性の視点」「生命の尊厳」と命名した。これらが、ヒトクローン研究の容認度に関連する要因であると考えられる。これらを下位尺度とする容認度関連性尺度を作成した。ヒトクローン胚研究ならびにクローン人間研究への賛否や性別による差を見るため、それぞれ下位尺度ごとにt検定を行うとともに、下位尺度間相関を算出した。

その結果、ヒトクローン研究への賛否を判断する際には、「生物・医学的可能性」「発展競争」「子孫継承」を研究賛成派の方が反対派よりも重視していることが明らかになった。一方、「女性の視点」「生命の尊厳」については、明白な差は見られず、賛成派・反対派とも重視していることが明らかになった。また、性別による有意な差は、全ての下位尺度で見られなかった。

4. 結論

本研究で明らかにされたヒトクローン研究の容認度に関連する要因は、「生物・医学的可能性」「発展競争」「子孫継承」「女性の視点」「生命の尊厳」である。これらのうち3つ目の要因までは、研究の容認度によって重視のされ方に差が見られた。この背景としては、被験者に理系専攻の学生が多数含まれるために、科学技術の発展の可能性を信じている者が多いことなどが考えられる。また、残り2つの要因に差が見られなかったのは、大学生までの経験では、女性や生命の尊厳に関わる問題をまだ自らの問題として実感できていないため、模範的な回答をしたことなどが考えられる。しかし、これらの仮説については面接法などにより更なる調査を行う必要がある。

最後に、ヒトクローン研究について望ましい意思決定をするために必要な知識・能力について考察した。今回の問題に自信を持って回答するためにはどのような知識や能力が必要か、という問いへの自由記述回答などもふまえ、必要な知識を「科学的知識」や「多様な文化・宗教に関する知識」などの7領域とした。また、必要な能力を「多面的に物事をとらえ考える力」「主体的に物事を判断する力」「自らの意思決定の社会的意味を考える力」などの4領域とした。このような知識や能力をどのように育成していくかは、今後の課題としたい。